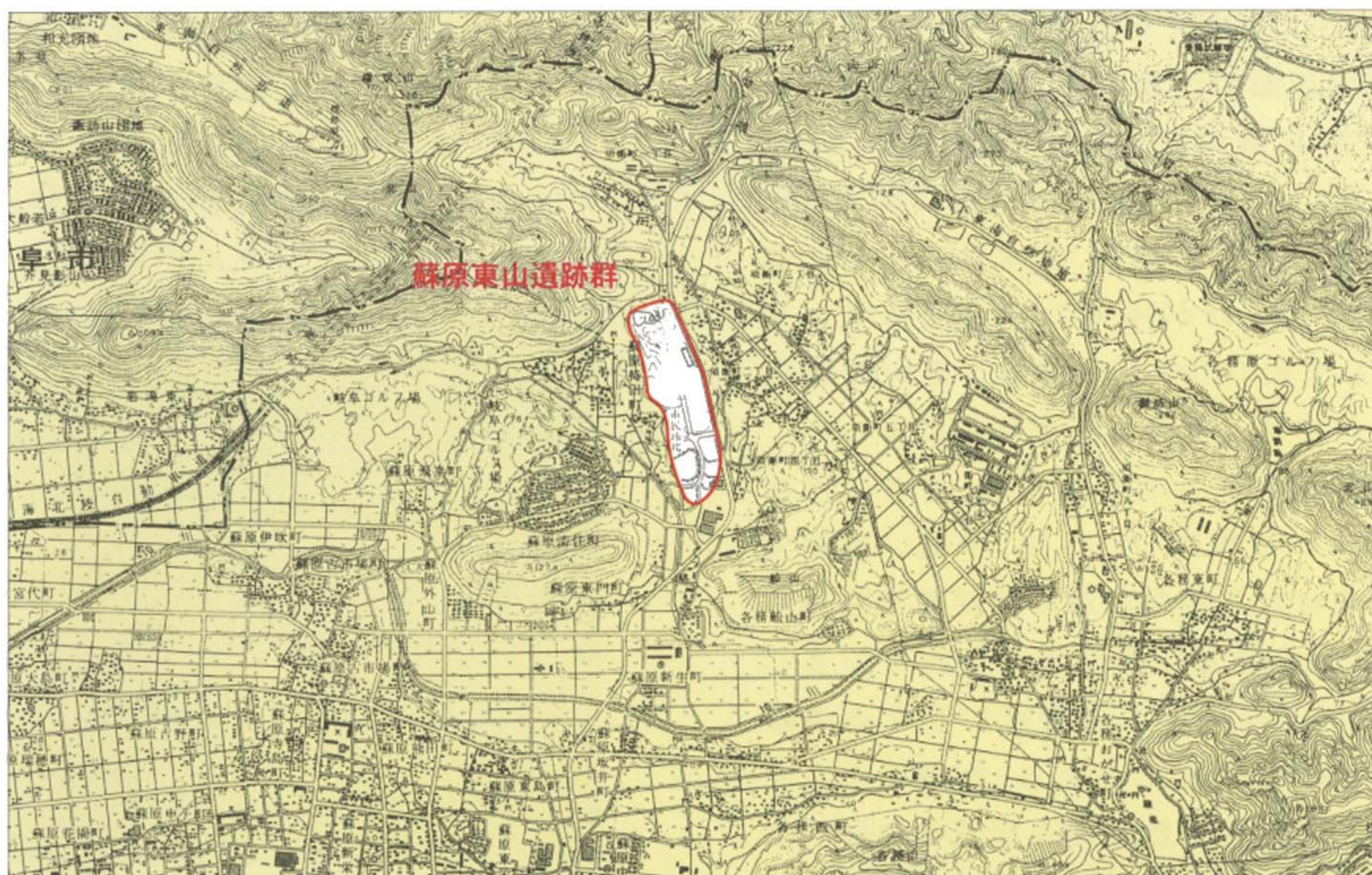
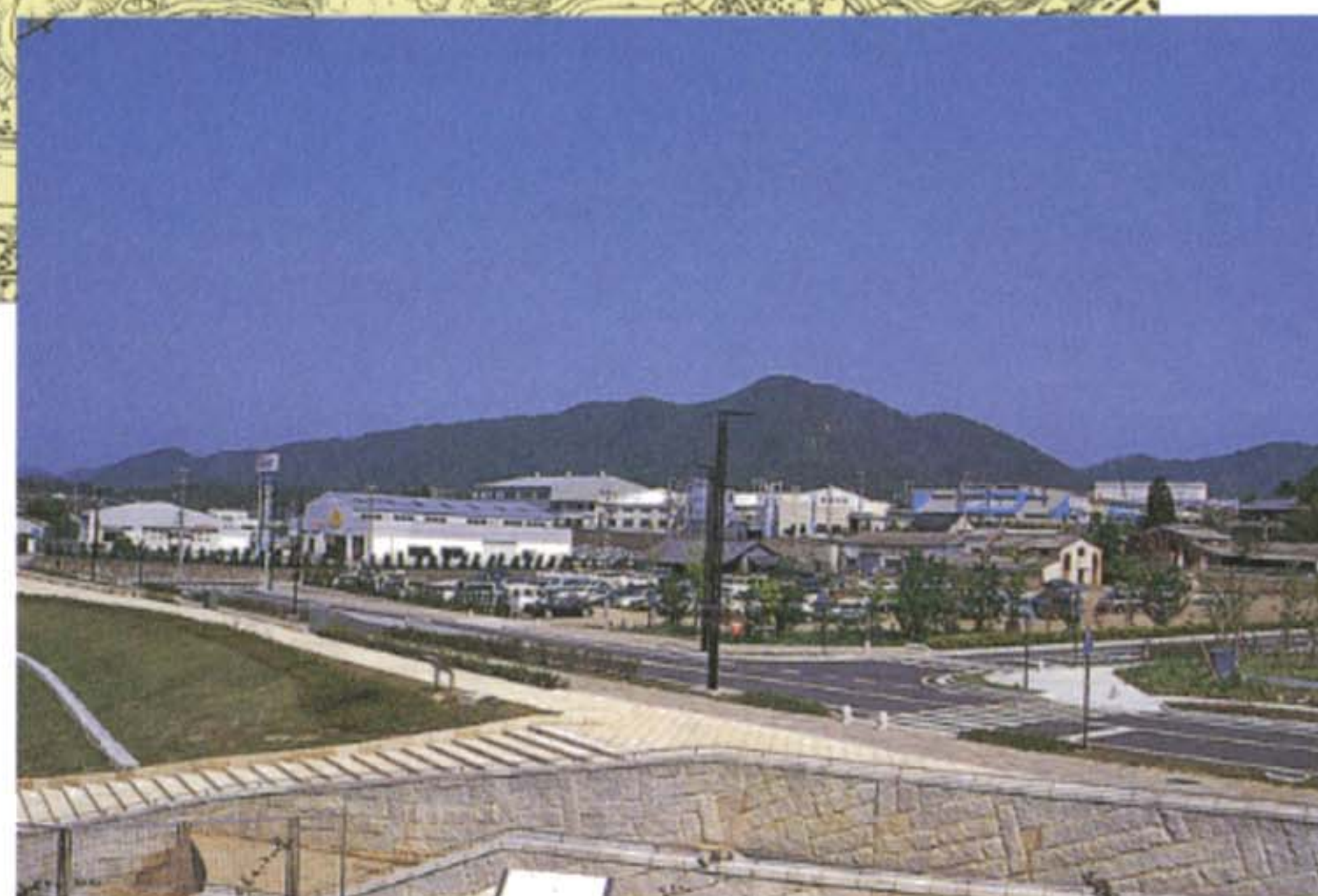


蘇原東山遺跡群

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL (0583) 83-1123
平成11年8月31日



蘇原東山遺跡群発掘前（西から）



蘇原東山遺跡群の現在（東から）

そはらひがしやま

蘇原東山遺跡群の発掘調査

昭和60年10月から平成2年3月までの4年5ヶ月間にわたって、各務原市蘇原持田町の東部にひろがる丘陵一帯で埋蔵文化財の発掘調査が行われました。

かつて東山と呼ばれたこの丘陵は、現在では東山2～5丁目と町名も変わり、住宅団地や工業団地、そして市民球場などが建ち並ぶ各務原市北部の拠点として著しい発展をとげています。また、平成10年には

県道をはさんだ東側の須衛町2丁目地内にVRテクノセンターがオープンし、先端技術産業の拠点地域としてもその重要性はますます高まっています。

発見された遺跡の内容

発掘調査は、南北約1.1km、東西約0.3kmのおよそ33万m²におよぶ東山丘陵の全域を対象として行われました。その結果、縄

文時代早期から前期にかけての居住地が丘陵の尾根部分に3ヶ所発見されたのをはじめ、弥生時代末から古墳時代初頭にかけてつくられたと考えられる墳丘墓が1基と古墳時代につくられた古墳などが20基（内訳は後期初頭の円墳1基、後期末の方墳4基・小型石室墳12基・土坑墓2基、時期不明1基）、さらに平安時代中期（10世紀）の灰釉陶器窯が1基と、窯本体はすでに壊されて灰原だけが残っていた窯跡が1ヶ所、そして約700年前の鎌倉～室町時代につくられた積石塚が1基発見されました。

発掘調査が開始された当初、ここに所在する遺跡の種類については、小高い丘陵でしかも痩せた尾根がながくのびる地形からして、古墳や窯跡のみと考えられていました。しかし、以外にも各時代にわたる遺跡が多く検出されたことから、かつての人々の暮らしが山の自然環境と密接なつながりをもっていたということを実感させられました。

縄文時代の竪穴住居と焼石土坑

今から6千年以上前の縄文時代早期から前期にかけて、各務原の北部丘陵でも人々が生活を営んでいたことが発掘調査で明らかとなりました。

3ヶ所の居住地域は、尾根の最も高い場所を中心として周囲のゆるやかな斜面にひろがっており、それぞれ200～300mほどの間隔をおいて分布しています。そこで発見された遺構は、竪穴住居跡が1軒と、蒸し焼き調理に使われたと考えられる焼石が詰まった穴（焼石土坑）が22基です。しかし、実際にはもっと多くの家の跡や焼石土坑があったのではないかと考えられますが、長い年月の間に自然の破壊や削平のため滅失してしまったと思われる。

1号住居址

地面を浅く掘り下げてつくられた竪穴住居跡です。丘陵尾根の南斜面につくられており、大きさや形は約4.3m×5.1mのややいびつな円形で柱穴は5本あります。床面の中央には、焼けて地面が赤くなった部分と、そこに縄文土器の破片がわずかに残っていました。おそらく炉で火を焚き、土器で食物を調理していたのでしょう。



1号住居址全景



16号(右)・17号(左)焼石土坑

16・17号焼石土坑

あまり壊れることなく残っていた遺構です。大きさは約80cm×60cm、深さは約20～25cmです。地面に円形の穴を掘り、そこにたくさんの石を詰め込んで木の実や、あるいは狩りで得た獲物を蒸し焼きにしたと考えられます。

16号焼石土坑と17号焼石土坑は、約2m離れて並んでつくられていました。それが一度に沢山の調理をするためなのか、あるいは調理の方法や使い方に違いがあるのか、当時の人々の食生活を考える上で貴重な資料となります。

また、2号焼石土坑の底部には扁平で丸みのある河原石が1個置かれており、焼石土坑の構造を考える上で重要な遺構です。



2号焼石土坑の断面

古墳のつくられた時代

弥生時代終わりの3世紀から奈良時代初めの8世紀にかけて、日本では多くの古墳がつけられました。



1号墳の全景

そうした社会の動きの中なかで、蘇原東山丘陵でも地域の豪族たちがそれぞれの時期

に特色のある墳墓を築いています。小高く見晴らしの良いこの丘陵は、豪族の墓をつくる場所として最適だったのでしょう。

1号墳

丘陵の尾根頂上部につくられた9.5m×8.5mのほぼ方形を呈する墳丘墓です。墓坑は発見されませんでした。墳丘の周囲を巡る溝から出土した土器は、弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけてのものです。

このような墳丘墓を築いた地域の有力者の中から、やがて大きな力を蓄えてさらに大豪族となるものが現れました。彼らは古墳時代前期から中期の4～5世紀になると、全長が100mにもおよぶ巨大な前方後円墳を造るほどに力をつけ、地域の王者として権力をふるうようになるのです。

蘇原東山遺跡群とその周囲にはこの時代の遺跡や遺構は発見されていませんが、各務原市域では東部の鶉沼地区に県下第2位の大きさを持つ坊の塚古墳（前方後円墳 全長120m 古墳時代中期）があり、西部の那加地区には柄山古墳（前方後円墳 全長82m 古墳時代前期）や、岐阜市琴塚古墳（前方後円墳 全長115m 古墳時代中期）が所在しています。つまり、弥生時代の終わりには蘇原地区の境川流域で墳丘墓が出現したのですが、なぜか次の古墳時



1号墳から出土した土器

代になると、東西の鶴沼地区と那加地区に巨大な古墳が出現したのです。このことは、各務原では弥生時代の社会から古墳時代の社会へと移行する際に、大きな変化が存在したことが推測できるのです。

9号墳

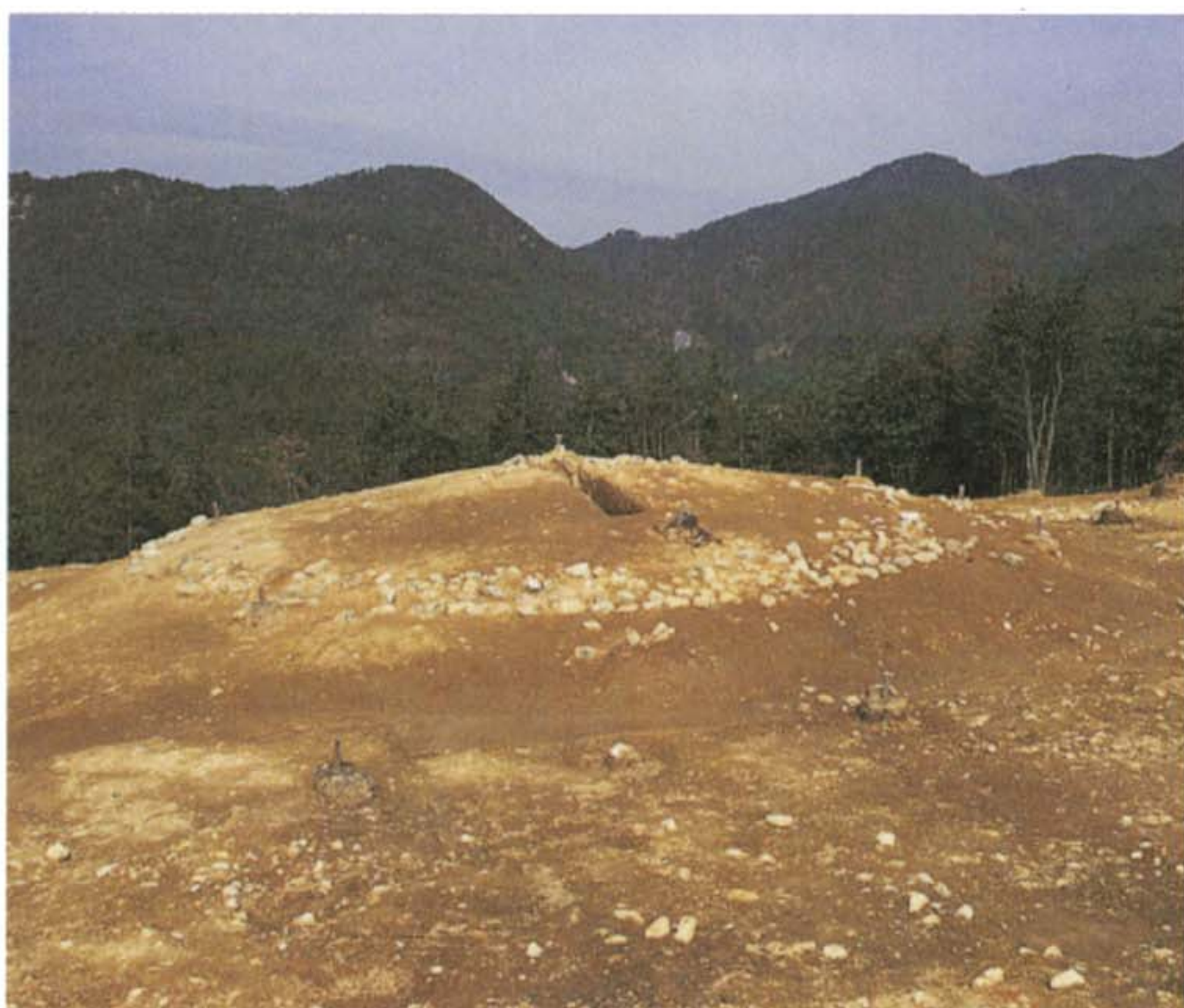
その後、今から約1500年前の5世紀終わり頃になると、100mを越える巨大な前方後円墳は姿を消して、数10mクラスの大さの古墳が数多くつくられるようになりました。

それまでの限られた大豪族だけが巨大な古墳をつくる社会から、新たに力をつけてきた中・小豪族が多くの古墳をつくる社会に変化したのです。古墳時代後期のはじまりです。

9号墳は丘陵尾根の最高所に位置しています。直径が18mの円墳で墳丘の中段には葺石、あるいは外護列石とよばれる石組を巡らして墳丘を立派にみせています。

埋葬方法は古墳の中央部に竪穴状の墓坑を掘り、遺体を納めた木棺を直接その墓坑に埋めたと考えられます。墓坑の西側からは副葬品として須恵器の壺や甕がまとまって出土しました。

このような竪穴状の墓坑を持つ古墳は、6世紀初頭頃に横穴式石室という新しい



9号墳の全景

石室の作り方が普及しますと美濃では急速に廃れ、やがて横穴式石室を埋葬施設とする古墳が主流となりました。



9号墳から出土した須恵器

6号墳

6世紀から7世紀半ばにかけて、蘇原東山丘陵ではふたたび古墳が築かれなくなりました。それは、この時期の多くの古墳は、丘陵上ではなくて平地部や低い丘陵の裾部に築かれていますので、古墳の立地が変化したためではないかと考えられます。しかし、9号墳の築造から約200年が過ぎた7世紀終わりから8世紀初頭になると、蘇原東山丘陵には三たび豪族たちの墳墓が築かれるようになりました。

この時代は壬申の乱（672）を経て、天武・持統天皇を中心とする中央集権国家体制の整備が急がれた時代であり、各務原地域でも山田寺跡や平蔵寺跡などの大規模な古代寺院が建てられました。そして、それらの古代寺院が集中的に建てられたのが、境川流域の蘇原地区だったのです。

古墳時代の前期には、なぜか有力な古墳が各務原地域の東と西に移動し、中央部の蘇原地区は古墳の空白地帯となっていました。古墳時代の後期からはふたたび蘇原地区に多くの古墳が築かれるようになりました。

古代寺院の建立とは、こうした古墳築造



6号墳の全景

の政治的・経済的基盤の上に成り立ったものであり、壬申の乱に際して大海人皇子（天武天皇）側に立ち勝利をおさめた美濃の豪族たちは、当時の先進文化の象徴である寺院の建立を積極的に受け入れるとともに、依然として伝統的な古墳の築造も続けていたのです。

6号墳は一辺が約8～9mの方墳で、四辺に葺石（外護列石）を巡らせていますが、南側のみ2段の葺石（外護列石）をもっています。これは埋葬主体部である横穴式石室が南側に開口するところから、古墳の正面を荘厳化する意味があったのでしょう。そして、古墳の形態がそれまで主流であった円墳ではなく、新たな方墳であるところに、地方への新しい文化や思想の浸透がうかがえます。



6号墳の石室内遺物出土状況

6号墳は石室が全長6.4m（玄室4.2m、羨道2.2m）、奥壁幅約1.0mという小型であることから、横穴式石室の特徴である追葬を想定していないと思われることも、最終末の古墳の姿というべきかも知れません。なお、6号墳の東側周溝内からは、礫とともに須恵器や土師器の破片、そして鉄を精錬した際にできる鉄屑（鉄滓）が多く出土しました。



6号墳出土の須恵器と土師器

6号墳に葬られた人物は、製鉄という当時の重要な技術を管理し生産に関わる立場にあったのかも知れません。

3号墳

ほとんど墳丘を持たないと考えられる古墳です。全長2.15m、奥壁幅0.65mという一人を埋葬するための小規模な石室です。



3号墳の全景

6号墳とほぼ同時期につくられていることから、あるいは6号墳などの方墳を築造した人たちと、この3号墳のような小型石室墳に葬られた人たちとの間には、同じ集団内でも何らかの身分差があったのではないかと考えられます。

1号・2号土坑墓

2基ともに長さ約1.20m、幅約0.50mの大きさでほぼ並んで発見されました。

1号土坑墓の西側からは須恵器杯と土師器甕が出土し、2号土坑墓の埋土からは須恵器杯が出土したことから埋葬用の土坑と考えられます。時期は6号墳や3号墳とおなじく、7世紀終わりから8世紀初頭です。

ところで、この時代になぜ、同じ墓域に異なる形や大きさ、そして石室を持つ古墳や土坑墓という異なる性格の墳墓がつけられたのでしょうか。6号墳と3号墳、さらに1・2号土坑墓というように、身分的な階層差があるように考えられる墳墓がどうして同じ場所につくられたのでしょうか。それは、古墳時代が終わりに向かうとともに、新たな古代国家建設に向けて当時の社会がどのように変化したのかという問題でもあります。各務原の古代を考えるうえでも大きな問題ではないでしょうか。



1号(左)・2号(右)土坑墓

各務原市の北部に広がる各務原山地は、古墳時代後期から須恵器と呼ばれるやきものを生産する場となりました（美濃須衛古窯跡群と呼ぶ）。そして奈良時代には、当時の国の関与を受けて須恵器生産では全国でも有数の窯場となりました。しかし、平安時代になって国の力がしだいに衰えるとともに、美濃須衛古窯跡群でも窯数が減少するようになり、やがて平安時代中期（10世紀）には須恵器生産はほぼ消滅して、灰釉陶器と呼ばれる新しいやきものの生産に転換して行きました。



1号窯址全景

1号窯址・2号窯址

1号窯址は蘇原東山丘陵の西側につくられた灰釉陶器の窯です。全長は約5.4mで地面を浅く掘り窪めて天井を張った窰窯と



1号窯址出土の灰釉陶器

呼ばれる形態です。この窯では碗や皿のほか、瓶や鉢・甕・硯を焼いていました。

2号窯址は丘陵の東側につくられた灰釉陶器の窯です。残念ながらすでに過去の土取り工事によって、窯の本体は削られてなくなっていました。失敗品を捨てた灰原はよく残っていました。



2号窯址灰原の発掘



2号窯址出土の灰釉陶器

1号窯と同じく碗や皿類のほか、瓶や鉢・甕など一般的な製品のほか唾壺や小瓶、そして火舎と呼ばれる香炉の一種なども焼かれていました。

1号窯と2号窯はそれぞれ単独1基の操業でしたが、両者の年代はそこで生産された碗や皿の型式からすれば平安時代中期の10世紀後半代です。そして2号窯が1号窯よりやや古いと考えられます。

中世の墓といのり

山は富士山や御岳そして白山など、その山自体が信仰の対象とされる場合もありますが、普段なにげなく見過ごしている近くの里山にも、古い時代の信仰に関わるような遺跡や遺構が存在しています。



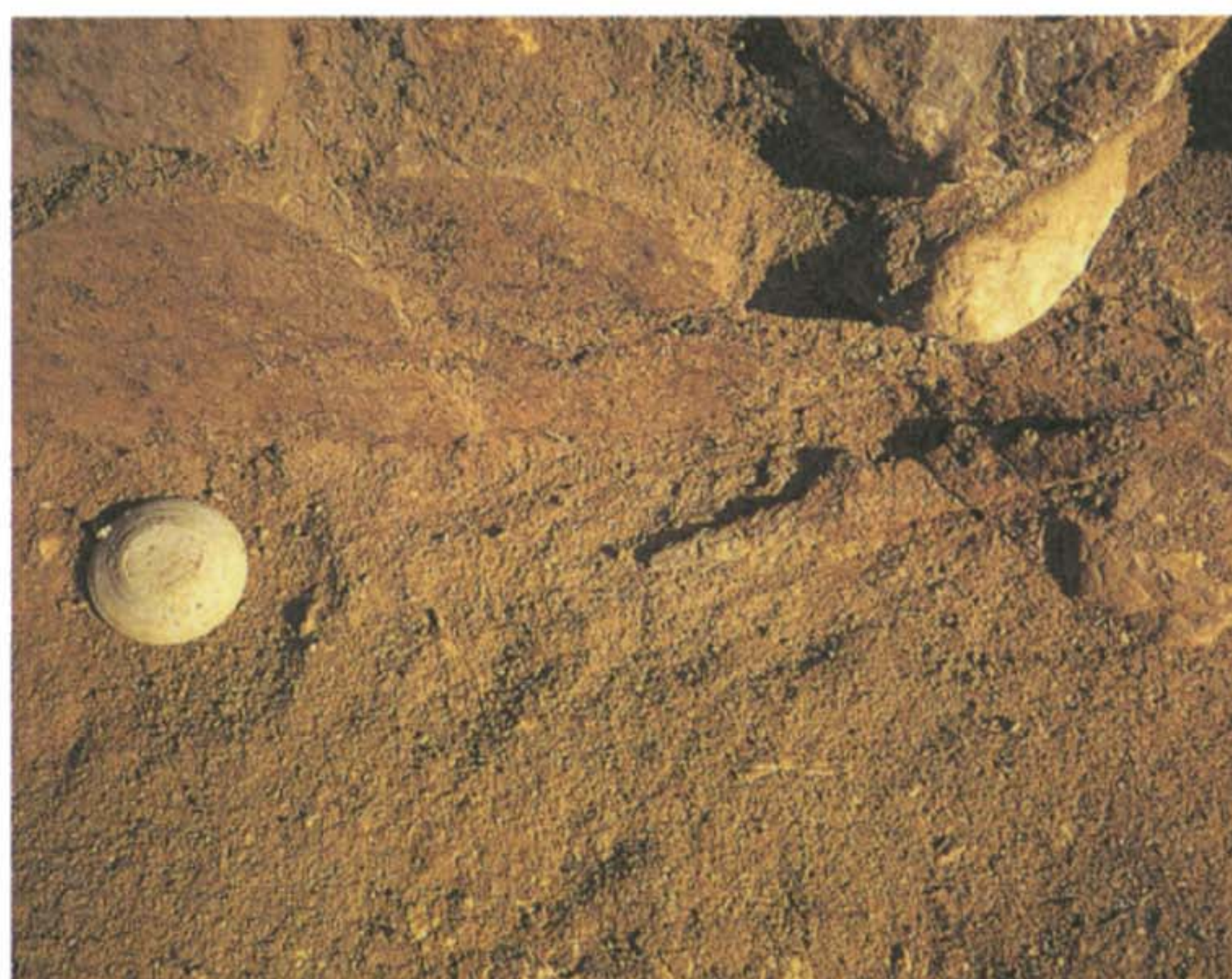
6号墳石室内中世墓

6号墳石室内中世墓

6号墳は、すでに古墳時代の7世紀終わりから8世紀初頭にかけてつくられた方墳として紹介しましたが、主体部の横穴式石室のなかに、鎌倉時代中期の13世紀半ばから14世紀頃にかけて人を埋葬した痕跡が見つかりました。それは火葬にされたかと考えられる人骨片とともに、山茶碗と呼ばれる当時のやきものの小皿が多数出土し、それとはやや離れて短刀や別の小皿も出土しています。

骨片が出土した位置と短刀が出土した位置とは距離も高さも離れていましたので、ここでは少なくとも2度の埋葬が行われたと考えられます。

古墳に中世の墓が同居するということは、単なる偶然ではなく古墳とはいったい何なのか、数百年後の時代まで人々がどのような意識で古墳というものをみていたのかなど、それぞれの時代の社会の移り変わりと共に考えなければならない問題です。



6号墳石室内中世墓小刀出土状況



1号積石塚の発掘

1号積石塚

6号墳内中世墓とともに、中世の人々の信仰の世界が少し明らかとなりました。

丘陵の尾根筋に発掘前には古墳かと考えられていた遺構がありました。調査の結果、



1号積石塚懸仏出土状況

直径が約10mの全体が礫からなる積み石塚であることが判明し、その礫に混じって懸仏と呼ばれる仏像が出土したのです。その懸仏は意識的に壊されており、何らかの祭祀の対象としてこの塚に埋納されたと考えられます。そして、塚の石積みをすべてはずしたところ、塚の中央部の地山直上から「至元通寶」という中国の元の時代（1285年頃）につくられた貨幣が一枚出土しました。これは塚をつくる際の地鎮祭の跡かとも考えられますが、くわしいことは不明です。しかし、この貨幣によって、少なくともこの塚が鎌倉時代の1285年以降につくられたことは確かでしょう。



1号積石塚出土懸仏

ところで、このような塚の性格とはいったいなんなのでしょうか。土地の境にお祀りをして病魔や悪霊などの侵入を防ぐためとか、修験者の修行場や祭場などが考えられますが、その答えは現在ではまだよくわかっていません。古墳の意味とともにみなさんも考えてみませんか。

蘇原東山丘陵の発掘調査からは、多くの貴重な歴史資料を得ることができました。遺跡の発掘調査は縄文時代や古墳ばかりではなく、中世の名もない人々の生活も明らかにしてくれます。わたしたちの身近にひろがる大地には、いまだに多くの歴史や文化が遺されているのです。